

---

# 居酒屋・ヒーローズラウンジ

土龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

居酒屋・ヒーローズラウンジ

### 【Zコード】

N2149D

### 【作者名】

土龍

### 【あらすじ】

くたびれたヒーローの語る子供の夢を破壊する物語。

(前書き)

私は何も事情は訊かないよ。ただ、あなたのグチを聞くだけさ。

ここは居酒屋『ヒーローズラウンジ』。世を騒がす悪党と戦うヒーローの為の聖地。

働いているのは店主である私と桃野香織というアルバイトの少女だけだ。ちなみに彼女はかの有名なヒーロー、桃太郎の子孫である。常に愛刀の桃一文字なる脇差を手放さないが、さすがに仕事のときは外してもらっている。お客様の中には刀を持った奴を相手にしている方もいるからだ。斬りあいにでもなつたら聖地どころか誰かの墓場になつてしまつ。

今日もお客様がやつてきた。とんとんと戸を叩いている。香織ちゃん、開けてやつてくれ。

「はいはい。開いてますからどうぞ勝手に入つていいですよー

」「いや、開けてくれ

「鍵開いてるから勝手に入つてくるでしょ、店長?」

「あの人は特別なんだ。……まあいい、なら私が行く」

小首をかしげてアルバイト少女は考え込む。そうした仕草が可愛らしいためか、お客様の中にはじつとそれを見つめて和んだ空気を楽しみに着ている人もいる。一応彼女もヒーローの一人なのだが、ここではそのことはオフレコになつているのだ。

「つと、いけない。今は戸の外にいるヒーローをお迎えしなくては。」「はいはい、どうも、超人さん。とりあえずそこをどいて裏庭に回つていただけますか。表の道が渋滞になるんで」

じゅわ、と返事をして一步でうちの店を乗り越える。ずしんと地響きがしたが店の人間は大半が常連なので驚く様子は無い。私は裏にある勝手口から外に出ると、お客様の注文を聞く。

「超人さん、今日は何にしますかー」

「焼酎お湯割り、2：1で」

やううと思えばこの人は地球言語を話せるらしい。一応しばらく胸に流星のバッジをつけた防衛軍の人憑いてたため、自然と覚えられたそうだ。

「はいよ、お湯割り」

「どうも」

上から巨大な手が伸びてきて、中華なべに盛つたお湯割りの焼酎を上へと運んでいく。超巨大な中華なべも、この人の前ではお猪口以下の小さな器にしかならない。

「一杯二万円もする量でも、あなたには全然足りないですよね」「しかしグチを聞いてもらうのだから何かしら飲み食いしなくてはルール違反だと思うのでな」

表情が変わらないのによくわからないが、多分苦笑してるとと思う。ちなみにこの超人さんの給料は月々三十六M78らしい。一M78は日本円に換算すると約一億円とのこと。

「というかどうやって呑んでるんですか」

「わたしは太陽エネルギーで出来ているので、全て蒸発する」

意味ないだろ。言わないけど。すると超人さんはがっくりうな垂れ、とつとつと語り始めた。

「……聞いてくれないか、店長」

「ええどうぞ」

「もう疲れた。仕事したくない」

うちの店でも一番高い頻度で聞くグチだ。

「どうしてですか」

「空飛んでる最中に人身事故起こしてしまったから命を渡して、生き返った彼と共にしばらくこの地球で怪獣と戦つて……ゾンと戦つてから兄さんに助けられて故郷に帰れたはいいけど家族からは非難の嵐。裁判の結果三万年牢獄に入れられた」

「随分入りましたね。というかならなんでここにいるんですか」

「面会にきた太郎を怒らせて、超ダイナマイトを使わせて牢獄を破壊したのだ」

ただの脱獄囚だよこの人。

「逃亡には随分時間がかかった。しかし随分逃げたからしばらくは大丈夫だろうと思う。眼ファイラスのところに一回泊まってたが、窓の外を兄さんが通つたのを見たときはさすがにひやっとしたな」

一度戦つた相手のところに泊まつたのかこの人。話だけ聞いてると家出中の中学生と変わらんな。

「で、どうする気なんですか？」

私が尋ねると、超人は肩を落とした。

「昨日わかつたがわたしには五千M78の保険金がかけられていた。どうやら、家族はわたしを怪獣と戦つてたよつに見せかけて殺るつもりらしい」

どんなヒーロー一家だよ。ダークヒーロー通り越してる。ピカレスクか？」

「携帯電話を持ってきたんだが、毎晩十一時に電話がかかってくる。電話の向こうでは怪獣たちの悲鳴があがつっていた。多分、何も言わなかつたが『おまえもこういつ悲鳴をあげさせてやるぜ』という意味に違いない」

「家族でしょう。そこまでやるはずないですよ」

「いいややる、あいつらは絶対に殺る。実際、わたしも狩られる立場になるまでは平氣で怪獣を惨殺していた……今思えば、葉ルタンは一族郎党皆殺し、ジャ見ラにいたっては守るべき地球人だつた。わたしは 罪をあがなうために殺されるのかもしけれない」

普通それは怪獣の遺族がやるべきだと思うが氣のせいかな？

と、その時空の彼方から見覚えのある人がやつてきた。超人さんが怯える。

「は、母様……」

どう見てもその方は鉄アレイっぽいものを持っていた。

「覚悟はいいかしらマンよ」

そのまま超人さんは消えた。常連がまた一人、いなくなつた。

店に戻ると、香織ちゃんが誰かの相手をしている。良く見ると田曜朝にふたりで戦っている女の子の黒い方だった。

「もう、田の方を信じられない」

「だいじょーぶですよー。多分ですけど菜の葉か運命ちゃんなら黒い方である運命ちゃんの方が人気ですから」

論点ずれてるぞオイ。

お客様の一人が香織ちゃんが剣客であることを知り、軽く手合わせがしたいと言つてきた。

店の裏からは『インビジブル空氣』だの『約束された勝利の刀』だの聞こえてくるが無視した方が身のためだろう。前にああいう戦いを観こつとして、右腕を『もつていかれた』ことがあった。

「はい、いらっしゃい」

バイクの音が聞こえたので誰が着たかは容易に想像がついた。  
「やあ……マスター。サイクロン号で最高速を出してきたよ」

確実に速度が違反すると思うんだが。

「なんにしますか？」

「……芋焼酎」

やつぱりバッタだから植物系がいいのだろうか。

「どうですか、今日の焼酎は」

「最高だね……マスター、やつぱりボクはこの店が一番好きだよ……」

「……」

ムダに溜めてしゃべらないでほしい。

「ありがとうございます。ところでツケが溜まつてますが

「聞いてくれ……。最近金が入らない」

出でつてくれ。

「なんですか」

「ボクの仕事は……怪人を一人倒すことに、歩合制で給料が出るんだ……」

だから溜めるな、ムダに間を置くな。あと焼酎飲む姿が渋すぎてうつかりだまされそうになる。

「しかし！最近は諸ツカーカーの怪人も求人広告を出しても……来ないらしい、人が、全く」

三段論法？

「どうやら……ボクが、敵を倒しすぎたらしい……」

「ビビって諸ツカーカーになりたがる人がいなくなつた、と」

静かにバッタ仮面は頷いた。

「デパートの屋上のヒーローショー……あれですら、敵役は怪人一

人がいいところ……」

子供の幻想殺しだなこの人。  
イマジンブレイカ

「まあまあ、それでも頑張つているんでしょう

「ありがとう、マスター。ボクは……あなたの励ましただけでも頑張れるよ……」

だんだん気持ち悪くなつてきた。

「で、ツケなんですけど」

「……」

無視か。

「臓器でも売りますか」

「おいおい、冗談……だろう？」

「どうせ改造されてるんだから一個や二個とつても大丈夫だと思う

「おつと、諸ツカーカーが現れたらしい」

サイくロン号。アレはマジで早い。乗つて逃げられれば老いぼれ店長は追いつけません。

「さん」

私は部屋の隅に居た男に呼びかける。

男はこちらを振り向いた。

「どうかお願ひします、あの男を止めてください」

私は懇願している。

男は頷いた。

「はい」

そう、生ける伝説。

頼まれれば絶対に『はい』か『いいえ』でしか答えられず、フлагаを立てるための性質上こうした街の人からの頼みごとは『いいえ』を選んでも「お願いします！」を連呼されるなどしてほぼ確実に引き受けてしまう男（女のときもある）。

「　　のこうげき！ 戯画スラッ シュ！」

名無しの少女（少年のときもある）。猫の人形を持ち歩いて一股に分かれた帽子をかぶった黒服の女の子。間違えたこれは違う。常に剣を手放さず、様々な剣技、魔法を使いこなす最強の中の最強。

しかしこうした場では彼は名を持たない。

彼に名を与えるのは、心に勇者を持つプレイヤーのみ。

「さ……サイクロン号が……マスター、これはひどい」

「やがましい。さつさとツケ払え」

大破した愛車の前で立ち尽くすバッタ仮面に、私は冷酷に言い放つ。

「いいえ」

、おまえもさつさと払え。十二万Gもツケがあるだろ。

……ここは居酒屋ヒーローズラウンジ。

たまにでいいから私のグチを聞いてくれる人募集中。

(後書き)

暇があれば続編を書くつもり。です。ハイ。なの。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2149d/>

---

居酒屋・ヒーローズラウンジ

2010年10月8日15時07分発行